

新教科書にみる沖縄教材

— 小学校社会科 4 年生 —

里井 洋一

▼はじめに

改訂指導要領（1989年 3 月告示）と新検定制度（1989年 4 月改悪）の下での小学校教科書が、この 4 月（1992年）から使用され始める。

新検定については、『教科書レポートNa35』（出版労連1991年 1月）でいち早く何が問題とされたかが明らかとなった。全体的には俵義文『教科書はどうかえられたか・子どもたちがねらわれている』（学習の友社、1992年 1月）や山住正己・俵義文『小学校教科書を読む』（岩波ブックレットNa240）に詳しい。特に後者は具体的な事例の紹介があるため検定の内容がよくわかる。

また社会科の教科書については、『歴史地理教育』1991年11月号～1992年 3月号で「小学校新教科書を分析する」という特集が組まれた。小学校社会科教科書 8社全部を視野に入れて、教育内容の問題点を整理している。それと対象的に『社会科教育Na360, 1992年 2月号』「対比で考える—新教科書：使い勝手から採点する」は、旧教科書と新教科書を比較して「使い勝手」に焦点をあてている。両雑誌とも紙幅の都合上からか、具体性に欠けるうらみがある。

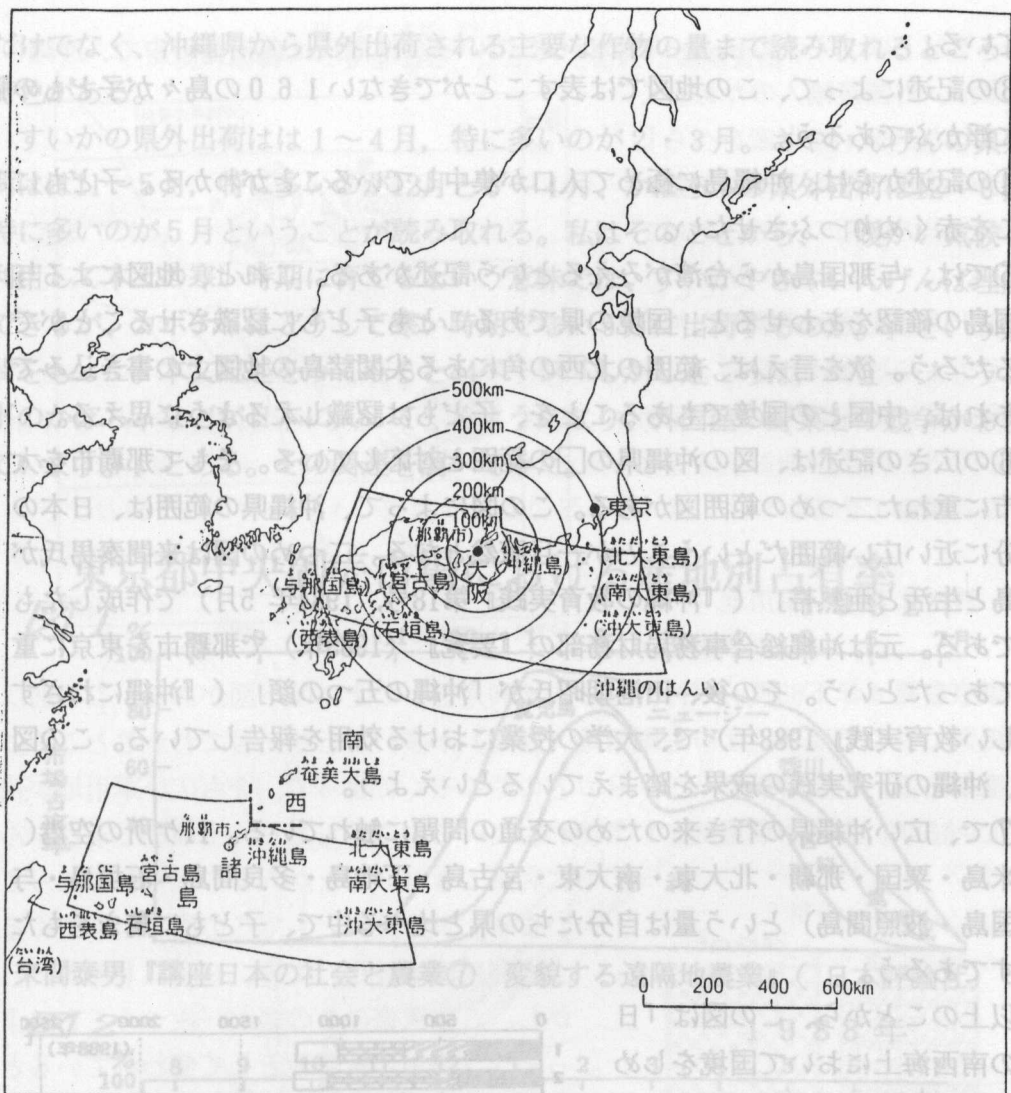
そこで私は、小学校社会科、特に 4 年下の教科書にみる「暖かい地方」の中で教材として教室で使える図やグラフを具体的に紹介する。

社会科教科書 8 社中、光村図書は沖永良部、学校図書と中教出版は石垣島、その他の教科書は沖縄島を扱っている。ひっくり返って、亜熱帯の特徴をもつ南西諸島でくることが出来る。

なお、沖縄にかんする教科書記述の具体的問題点については、本紙所収の鈴木論文を参考にしていきたい。

▼ 沖縄県の位置と広さがわかる図（日本書籍）

次頁の図を見ていただきたい。日本書籍 4 年下 49 頁右上に載った図である。1 頁の三分二を占めている。そしてその下には次のような文章が付されている。「①右上の地図を見ましょう。②九州と台湾の間につらなる島々のうち南半分は沖縄県です。③沖縄県には 160 以上もの島がありますが、そのうち人が住んでい



る島は50あまりです。④いちばん大きな沖縄島には、沖縄県の人口約120万人のうち約110万人が住んでいます。⑤日本のもっとも西にある与那国島からは年に何回かは台湾の島がみえることがあります。⑥陸地面積は大阪府より少し広い沖縄県ですが、東西の長さは約900キロメートル、南北は約400キロメートルもあります。⑦沖縄県の島々に住む人たちは、広い地域を舟や飛行機を使って行き来しています。そのため、沖縄県には飛行場が11ヶ所もあります。」(○内数字は里井による)

①は授業で言えば指示の部分にあたる。これによって子どもは図に注目する。

②で、その位置を明らかにするのだが、記述の「九州と台湾の間につらなる」と沖繩島から与那国までに目が行き、大東島が無視されがちになる。しかし、この図だと、沖繩島の範囲が□で囲まれている。そのため大東島にも目が行くように工夫されている。他の新教科書では大阪書籍を除き、大東島の位置は無視さ

れている。

③の記述によって、この地図では表すことができない160の島々が子どもの脳裏に浮かぶであろう。

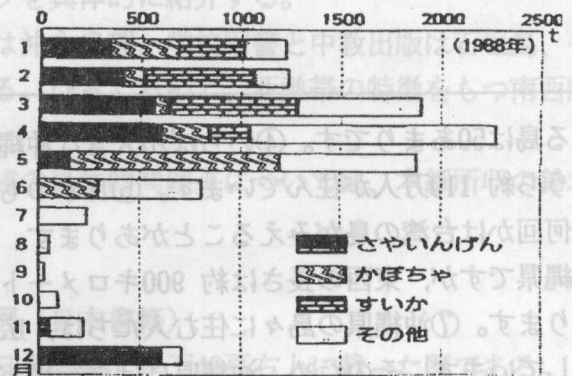
④の記述からは、沖縄島に極めて人口が集中していることがわかる。子どもにそこを赤くぬりつぶさせたい。

⑤では、与那国島から台湾がみえるという記述がある。これと、地図による与那国島の確認をあわせると、国境の県であることも子どもに認識させることができるだろう。欲を言えば、範囲の北西の角にある尖閣諸島の地図上の書き込みでもあれば、中国との国境でもあることを、子どもは認識しえるように思える。

⑥の広さの記述は、図の沖縄県の□の範囲と対応している。そして那覇市を大阪市に重ねた二つめの範囲図がある。この図によって、沖縄県の範囲は、日本の半分に近い広い範囲だということが一目瞭然となる。二つめの図は来間泰男氏が「島と生活と亜熱帯」（『沖縄の教育実践』第18号、1984年5月）で作成したものである。元は沖縄総合事務局財務部の『要覧』（1983年）で那覇市を東京に重ねてあったという。その後、田港朝昭氏が「沖縄の五つの顔」（『沖縄にねざす楽しい教育実践』1988年）で、大学の授業における効用を報告している。この図は、沖縄の研究実践の成果を踏まえているといえよう。

⑦で、広い沖縄県の行き来のための交通の問題に触れている。11ヶ所の空港（久米島・粟国・那覇・北大東・南大東・宮古島・下地島・多良間島・石垣島・与那国島・波照間島）という量は自分たちの県と比べる中で、子どもに驚きをもたらすであろう。

以上のことから、この図は「日本の南西海上において国境をしめる沖縄県が、日本列島の半分をしめる程の大きな広がりをもつ」という価値ある教育内容を含むという側面を持つのみならず、本文叙述が①の指示や③④⑤⑦などの補足説明が教授行為的役割をはたすことによって、すぐれた教材になっているといえよう。



● 県外へ出荷するやさいのうつりかわり
(1990年 沖縄県庁調べ)

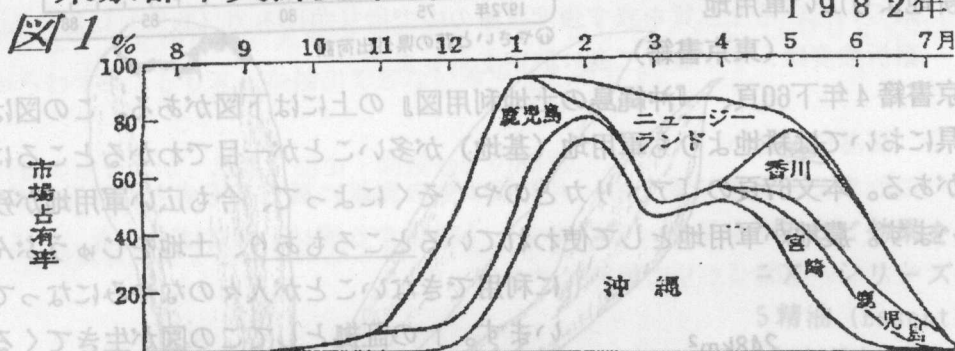
▼ 沖縄産カボチャは何故5月に県外へ出荷されるのか。（大阪書籍）

右上のグラフは大阪書籍4年下43頁にさししめされたものである。出荷量の月別グラフは東京書籍4年下62頁にもあるが、大阪書籍のグラフは、月別の出荷量を財無財置並の島東大、を編き書籍選大が書科選港の計、るいアけち夫工と

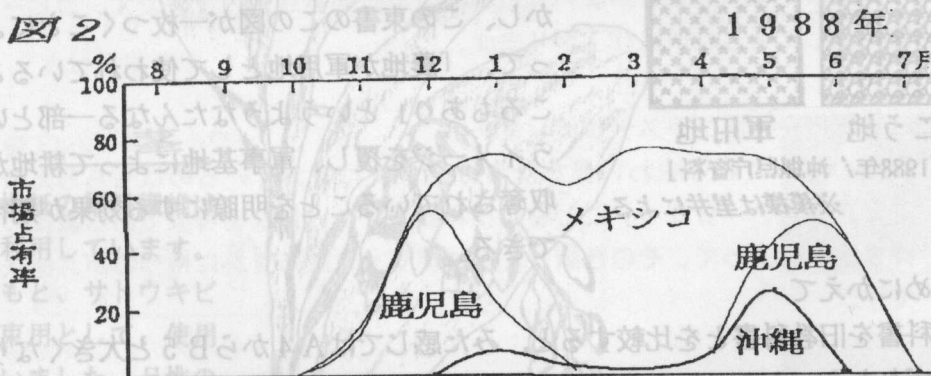
だけでなく、沖縄県から県外出荷される主要な作物の量まで読み取れるところに特色がある。

すいかの県外出荷は1～4月、特に多いのが2・3月。さやいんげんの県外出荷は11～5月、特に多いのが12月と3～4月、かぼちゃの県外出荷は12～6月、特に多いのが5月ということが読み取れる。私はそのことから、「暖かい気候を利用して本土の寒い時期に育てるという意味では、すいかやさやいんげんは理解できるが、カボチャはどうして寒い時期でない5月に出荷するのか。」という疑問をもった。本文記述をみると44ページ「しかし近ごろは、ニュージーランドのかぼちゃなどが日本に入ってくるようになり、外国産の野菜との競争がおきています。」とある。その関連を調べてみた。

東京都中央御売市場における産地別占有率



来間泰男『講座日本の社会と農業⑦ 変貌する遠隔地農業』（日本評論社）



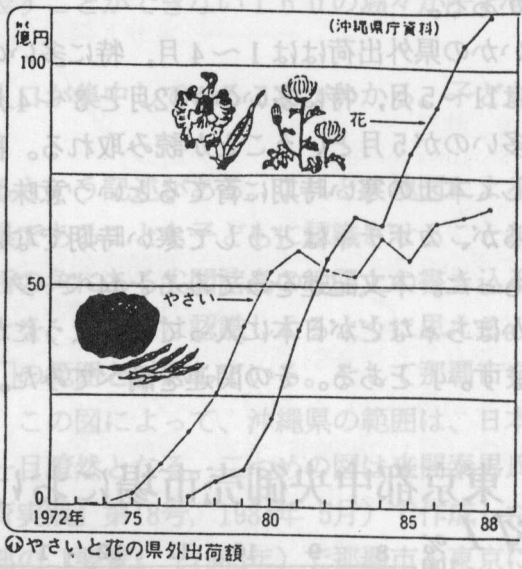
沖縄県庁『沖縄県の野菜と花きの流通』より作成 ※

図1と図2を比較すると沖縄産のカボチャに関して次のことがいえる。

1982年頃は冬場沖縄産かぼちゃの占有率は、二月には60%をこえていた。ところが、1988年には冬場の占有率はメキシコに奪われ、辛うじて五月だけが1982時点の水準を確保していることがわかる。大阪書籍で外国の代表としてあげたニュー

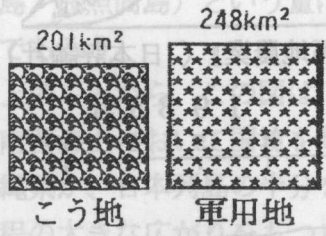
ジールランドはメキシコにとってかわられている。来間氏は前掲書の中で、沖縄の農家は、外国産輸入のため安くなったカボチャの生産をへらして他の品目に変える傾向が強い事を敗退の原因の一つにあげている。

以上大阪書籍が示唆した沖縄カボチャの敗退は、右図（日本書籍54頁）1980年代における野菜の県外出荷高の伸び悩みをひきおこすのである。



▼ 耕地より広い軍用地 (東京書籍)

東京書籍4年下60頁、『沖縄島の土地利用図』の上には下図がある。この図は、沖縄県においては耕地よりも軍用地（基地）が多いことが一目でわかるところに特徴がある。本文67頁の「アメリカとのやくそくによって、今も広い軍用地が残っています。農地が軍用地として使われているところもあり、土地をじゅうぶんに利用できないことが人々のなやみになって



〔1988年/ 沖縄県庁資料〕
※模様は里井による。

います。」の証拠としてこの図が生きてくる。土地利用図は教出、大書、日書にもある。しかし、この東書のこの図が一枚つくことによって、「農地が軍用地として使われているところもあり」というようなたんなる一部というイメージを覆し、軍事基地によって耕地が収奪されていることを明瞭にする効果が期待できる。

▼まとめにかえて

新教科書を旧教科書とを比較すると、みた感じではA4からB5と大きくなり、二色ずりから、カラーによる資料や写真がふんだんに使われるようになった。この試みは、教科書会社が、教育内容を伝える教科書から、子どもが資料を元に考えるという教材としての教科書へ脱皮を意図したものだと思われる（各教科書編集趣意）。しかし、各教科書、小学校4年「あたたかい地方」をみるかぎりでは、旧教科書の資料や図、写真をカラー化したものが多くその意図は必ずしも成功していない。ただその中で、前出の資料は、評価できる教材だといえよう。